

本年度も、ケイ酸質資材や有機物の継続的な施用を行い、溝掘り・中干しの適期作業を実施し、**高品質な「アルプス米」の生産**に取り組みましょう！

<R4年産の重点目標>

- ① 播種時期を遅くし、「老化苗」にしない
- ② よく換気し「軟弱徒長苗」にしない
- ③ 葉焼け・カビ・ムレ苗を発生させない
- ④ 田植えは5/15中心とする
- ⑤ 栽植密度は原則70株/坪とし深く植えない



1 土づくりの徹底 参照ページ:p49~56

令和3年産米栽培における**土づくり資材の施用率は51.6%**で、低い傾向にあります。土壌診断対策書をもとに積極的に土づくりに取り組みましょう。

○土づくり資材の施用

管内の多くの圃場ではケイ酸分が不足しています。前年秋に施用しなかった圃場は、土づくり資材を必ず春に散布してください（表1）。



作付圃場周辺の診断結果を check!

近年、ごま葉枯病の発生が増加傾向にあります。ごま葉枯病の発生は、ケイ酸、カリ、鉄分の不足により増加します。土づくり資材を散布し、病害虫に強い稲体にししましょう。ごま葉枯病は土壌条件や栽培環境と発病が密接に関連するため、土づくりを中心とする耕種的防除が重要です。



写真1 ごま葉枯病の病斑

表1 土づくり資材の施用量の目安

資材名	ケイ酸保証成分 (%)	標準施用量 (kg/10a)
粒状ケイカル	30	200
元気	24	100
シリカロマン	25	100
シンキョーライトP	66.1	100

○有機物の施用

腐植や加里が不足している圃場では、**醗酵鶏ふんを75~100 kg/10a 施用**しましょう。施用した圃場は基肥窒素成分を1~2 kg/10a 減肥してください。

○深耕による作土深の確保

トラクタの速度を落とし、ロータリーの回転数を遅くして、**作土深15 cm以上を確保**しましょう。特に秋耕できなかった圃場では、ゆっくり丁寧に作業を行いましょう。

2 春のカメムシ被害低減対策 参照ページ:p10、51

近年、早生品種のてんたかくだけでなく、中生品種のコシヒカリでも「**部分カメ**」による**格下げ**が増加しています。そのため、水稻作付前からカメムシ対策に取り組みましょう。

○ケイ酸質資材の施用

籾殻のケイ酸濃度の上昇は、割籾の発生を防ぎ、カメムシによる斑点米発生を軽減します。土づくり資材を散布して、ケイ酸分を補給しましょう（表1）。



写真2 割籾

○カメムシ類が発生・増殖しにくい環境づくり

春先のふ化幼虫の餌となるスズメノカタビラやスズメノテッポウ等のイネ科雑草の発生を抑えるため、水田畦畔の除草を行ってください（表2）。初期のカメムシ類の発生を低下でき、以後の発生も抑えられます（図1）。

表2 春の畦畔等の除草管理とカメムシ類の発生密度低減効果

除草対策		越冬世代に対する密度低減効果		期待される主な効果
方法	処理ポイント等	幼虫	成虫	
除草剤散布	4月下旬頃までに、バスタ液剤、ザクサ液剤等の茎葉処理剤を散布する	○	○	①幼虫は餌となるイネ科雑草が無く生存できない ②成虫の飛来や産卵がみられない
草刈り	穂が出ないように刈り取る	△	○	①幼虫の発育遅延や羽化率の低下 ②成虫の飛来や産卵の抑制

注) ○: 効果が高い、△: 一定の効果がある

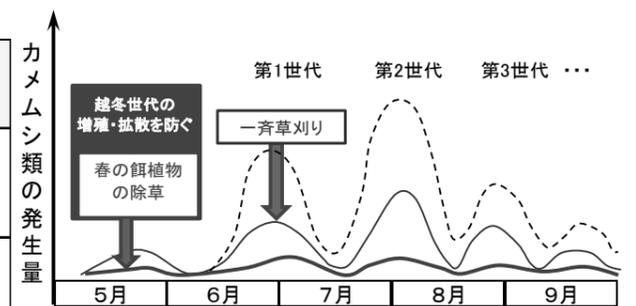


図1 カメムシ類の発生消長(模式図)

お願い・お知らせ

◎「生産記録簿兼GAPチェックシート」の記入・提出は必須事項です！

JAでは記録内容に基づき、出荷・トレーサビリティに対応するとともに、次年度栽培基準の見直しに活用しております。安全安心な農作物の継続供給のために、**生産記録簿兼GAPチェックシートは確実に記載し、必ず提出する**ようお願いします。



◎「電子メールによる営農情報の提供」を行っています。

- ・スマートフォンやパソコン等で簡単に登録でき、ご希望の情報を選択できます。
- ・右記のアドレスやQRコードから登録画面に進めます。
- ・詳細は「広報アルプス3月号」6ページをご覧ください。



JAアルプスHPでは他にも役立つ農の情報をお届けしています。
<http://ja-alps.com>



重点対策

昨年はヤケ苗やムレ苗が多発しました。
今年度はハウスの温度管理を徹底し、計画的な育苗作業により健苗育成をしましょう！

近年、育苗期間が高温多照となっており、育苗日数が長すぎると苗が老化します。そのため、育苗日数は5月15日田植の場合、**19日間を目安**に計画的な育苗を行いましょう。

表3 育苗計画の目安

田植予定日	浸種日	播種日	育苗日数	出穂期
5/10	4/8頃	4/19頃	21日	8/1頃
5/15	4/17頃	4/26頃	19日	8/4頃
5/20	4/25頃	5/3頃	17日	8/7頃

<育苗作業スケジュール：5月15日田植えの場合>

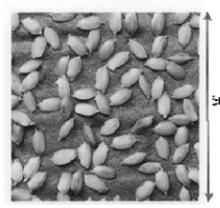
月日	作業	温度	作業ポイント
事前準備	ハウス準備	 ハウス毎に1つ 温度計を準備	<ul style="list-style-type: none"> かん水装置を点検し散布ムラを調整 ハウスまわりに排水溝を設置
	機材消毒		<ul style="list-style-type: none"> 育苗資材等はイチバン（500倍液、瞬時浸漬）で消毒
	比重選 ↓水洗い ネット詰め		<ul style="list-style-type: none"> 比重液を作る際は、硫安はよく溶かす(表4) 比重選後の種籾は、十分に水洗いする 種籾は種子ネットの7割程度を目安に、余裕をもって詰める
4/17	種子消毒	水温 10~15℃ 桶ごとに 温度計を設置	<ul style="list-style-type: none"> モミガードC水和剤200倍液で24時間浸漬 薬液は種籾の2倍量を準備(表5) 2~3回上下に攪拌し、種子を完全に浸漬 ※廃液の処理は業者に依頼する等適切に行い、河川等に流さない！
	消毒済種子の場合は「浸種」から開始 浸種	水温 10~15℃ 特に浸種初日は 12.5℃を確保	<ul style="list-style-type: none"> 浸種期間の目安は、積算温度（水温×日数）120℃ 種子消毒の効果を高めるため、浸種開始後3日は水の交換をしない 浸種4日目以降は、酸素供給のため2日に1回は水を交換 種子籾の胚乳がアメ色で透明になったら、浸種完了
4/25	催芽	育苗器内温度 30℃	<ul style="list-style-type: none"> 催芽のパラツキを小さくするため、催芽中は1日に2~3回袋を反転 催芽の程度はハトムネ程度(写真1)
4/26	播種	 写真2 播種量の目安 (5cm四方に70粒)	<ul style="list-style-type: none"> 種籾はしっかりと水を切る 播種量は乾籾120(水切り籾150)g/箱(写真2) 苗箱施薬剤(参照ページ:p50)を播種同時施薬する場合、規定量が確実に入るよう調整 覆土は苗箱上面よりやや少な目(0.5cm確保)とする(図3)
	出芽	育苗器内温度 30℃	<ul style="list-style-type: none"> 事前に育苗器内のサーモスタットを点検 庫内の温度はこまめにチェック
4/29	搬出・緑化	ハウス内温度 昼：25℃以下 夜：10℃以上 温度計は 苗箱の横、苗の高さに設置	<ul style="list-style-type: none"> 芽の長さが1cm程度に揃ったら搬出 搬出後、覆土を落ち着かせるため、必ずかん水する 苗の白化を防ぐため、搬出直後は被覆資材で遮光 緑化したら被覆資材を速やかに除去
5/1	硬化		<ul style="list-style-type: none"> 水分不足による葉ヤケ防止のため、床土の乾きに応じてかん水実施 こまめに温度計をチェックし、気温の高い日中は十分に換気する 天気予報が晴れなら、常時換気する ※晴天の場合、外気温が低くてもハウス内温度は上昇します！ 強風時でも温度が高い時は、風下のすそを開ける 田植10日前頃からは、昼夜ともにハウスのすそを開け、外気に慣らす
5/15	田植え		

表4 比重液の作り方(うるち、水10ℓの場合)

比重	硫安
1.13	2.5kg

表5 薬液の作り方(200倍液)

種籾	水	薬剤
10kg	20ℓ	100g



写真1 催芽の目安

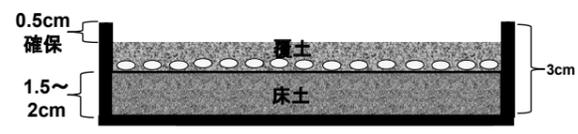


図3 播種イメージ

田植えに向けて①畔塗り②耕起作業③代かき作業の圃場準備を計画的に行いましょう。

～春の農作業安全運動展開中～ 転倒・転落事故に注意しましょう！

